



フィールドで考える

狩猟採集社会の老人たち

林 耕次 (はやし こうじ)

本館外来研究員

のだが、実際の首長は彼の妹婿にあたるメナタという壮年の男性であった。バジールの父親は偉大な狩猟者として知られる長老の一人で、メナタの前に首長を務めていたらしい。バジールは、なぜ自分が首長だとアピールしたのだろうか。彼の親族にかかわるプライドのせいなのか。あるいは、単に見栄を張りたいからなのか。その理由は今でもよくわからないが、そういう謎めいた行動や、ときにずるいところを見せる人間臭さがどこことなく憎めない。その人柄ゆえにわたしのなかでバジールは特別に印象的で、あのかの笑顔のままに夢にもたびたびあらわれる。

自己犠牲的なトゥーマ

バカの人びとは、季節に応じて森のなかを遊動生活する狩猟採集民として知られてきたが、定住化政策などの影響もあり、現在では畑をもち、一年の大半を集落で過ごしている。しかし、ときおりおこなわれる森での狩猟採集活動では、トゥーマとよばれる一部の狩猟熟練者らが指導的立場をとることは、定住生活が浸透した現在も変わらない。トゥーマとよばれるには、狩猟経験の豊かさや森に関する知識の深さが必要なため、多くがある程度年配である。わたしの調査地周辺でも、もつとも偉大なトゥーマの一人として

て知られるモービは、ふだん寡黙で、表情はじつに穏和だ。そのモービが率先して森に赴き、蜂の襲撃を恐れず蜂蜜採集に挑む姿や、トゥーマとしての経験と知識がもつとも発揮される命がけのソウ狩猟を淡々とこなす姿は印象的であった。モービは自己犠牲的ともいえる行動に、自らの存在意義を見出しているのかもしれない。そんなモービがいざ森での狩猟採集活動を終えてキャンプや集落に戻ると、自分の孫と嬉しそうに戯れる。緊迫した森での行動とのギャップも相まって、わたしには一層微笑ましい情景として映った。

偶然とは思えない来訪

森のキャンプに滞在中、アンドウムという老人がふらっと訪ねてきたことがあった。彼はわたしが知る限り、いかにも集落で隠居生活を送っているような、のんびりした雰囲気を感じるところから醸し出していた。それがあの日、老人にとっては決して楽ではないと思われる半日がかりの森歩きを経てキャンプにひよっこりと一人であらわれた。

わたしは大変驚いた。それはちょうど、バカのあいだでも非常に重宝される野ブタが捕獲された日でもあった。野ブタは、狩猟者の手にかかることなく、その場の年長者であるアンドウムに任せ

たくましく生を満喫しているように見えた。その一端を紹介したい。

忘れられない笑顔

わたしが初めてバカの集落を訪れたとき、とりわけ歓迎してくれたのがバジールという名の老人であった。彼は満面の笑みで顔を歪めながらわたしに握手を求め、自分が集落の首長だと猛烈にアピールした。しかし、間もなく判明した

れ、腰に付けたナイフを使って手際よく解体された。聞けば、ある年齢や出自に属する者たちが野ブタやソウなど特定の動物を解体したり、食べたりすることは忌避されることがあるからである。解体を終えたアンドウムは、しばし森のキャンプに滞在したのち、自ら解体した肉の一部をもち、集落に戻っていった。彼の来訪はあたかも偶然ではないかのよう

儀礼の中心的存在

集落における精霊儀礼でも、老人が中心的な役割を果たすことがある。精霊ジェンギは「森の主」ともいえる存在で、バカにとって畏敬の対象である。このジェンギとバカの人びとを仲介する役割の男性は「ジェンギの父」と表現されるが、この役割を担う男性は、しばし森の知識に深く精通する優れた狩猟者である。このとき、女性たちはコーラスで儀礼を盛り上げる。マレンゲという高齢の女性はとりわけ長身で、見るからに威厳を兼ね備えた容姿をしていたが、美しい歌声を奏でながら女性たちのコーラスの先頭に立ち、いわば指揮者の役割を果たしていた。また、男性に交じって、若い少年の踊りの指導にあたることもあった。

そのマレンゲが、わたしが森でのキャンプ生活を送っていた二〇〇一年三月に

儀礼における精霊ジェンギ



森で孫とくつろぐモービ



亡くなった。知らせを受けて一行とともに直ちに集落に戻り彼女の死を悼んだ。バカのみならず、近隣の農耕民や遠方から

らの来訪者も参加して、昼夜を問わず数日間をとおした盛大な葬礼が催された。マレンゲを知る多くの人びとに囲まれ、

わたしはそのとき、改めて彼女の偉大さを感じ知らされたのである。

儀礼に集まる人びと



アンドウムによる野ブタの解体